



# 「立花宗茂と閻千代」物語

「こんな大河ドラマが見てみたい」

【第5話】

■文：小山田桐子／挿：D&N

■イラスト：大久保ヤマト

※この物語は史実を基に、一部フィクションで作成されています。

【問】市観光課観光推進係 ☎77・8563

## 宗茂と閻千代、幼い日の出会い、そして二人は戦国最強の夫婦へ⑤

鬼道雪、陣中にて突然の死去  
遺言をめぐり、城は大パニック

1585年、立花城に戸次道雪が北野の陣中にて死去の一報が入る。病死だった。

自分の遺骸に甲冑を着せ、敵陣にむけて高良山に埋葬するようにという道雪の遺言。死してもなお、戦いの場にあるうとする道雪の執念であった。

墓を敵の馬蹄に辱められるのは忍びないが、主命は絶対であり、重かった。道雪の後を追って殉死をと言いつのる家臣達もいる中、沈鬱な空気が流れる。

決して表には出さないが、閻千代の心の奥深くにある悲しみを感じ取った宗茂は、その場の空気を打ち破るような（場の空気を読まないような）、そして至極当たり前の事をさらりとやってのけた。

「遺言はそうあっても、死骸をただ一人棄て置く事など道に反すること。立花城にお連れするのが道理である」

当初は殉死をと言いつ張っていた重臣由布雪下も、その言葉に我に返った。

「道雪様亡き後、我らの主は宗茂様だけである。この命、名譽のためでなく、宗茂様のためにこそ、捨てねばならぬ。そこを間違つては立花の武士とは言えぬ。道雪様の祟りは、この由布一族がすべて請け負おうぞ！殿、お下知を！」

子を手渡される。「道雪様が立花家を守るために残した大事な武器です」しかし、宗茂はその冊子を焼き捨てる。自分は弱い人間だからこそ、手に置いておけない、と。

満月の夜。姿が見えない閻千代を探す宗茂。彼女は一人離れた場所で、道雪を思い、月を見上げ泣いていた。「父は欠けているところのない、満月のような人だった。すべての家臣や民を明るく照らしてくれた。満月を失った今、私たちはどうすればいいのでしょうか」

立花軍は道雪の亡骸を伴って立花山城に帰還を果たした。道雪が死ぬまで貫いた「義宗茂、閻千代に自分なりの『立花の義』を誓う」

途方に暮れた口調の閻千代に、宗茂は「自分が光となろう」と力強く告げる。「自分はまだ欠けたところばかりで、満月にはほど遠い。しかし、そなたの光と合わせれば、足元を照らすことぐらいはできると思うのだ」

二人は寄り添い、満月を見上げる。「自分にはまだ、立花の義が何かもよくわからない。しかし、そなたと一緒にいることでそれを見出せる気がするのだ。一緒に戦ってくれるだろうか」

真摯な表情で閻千代を見つめる宗茂。閻千代は道雪の死に泣きはらした目を潤ませ、宗茂が延ばした手をしっかりと取る。



宗茂と閻千代

## 柳川にこの人あり

vol.83



書道家タレント  
原愛梨さん  
市内在住・25歳

## 書道にピアノ マルチタレントとして羽ばたく

8月に開かれた有明海花火フェスタでは、ステージを飾った横8mの大会横断幕を揮毫。また、音楽に合わせて書を描くパフォーマンスもステージで披露した原さん。書やイラスト、音楽などを融合したマルチな表現者として活動しています。

書道とピアノを始めたのは2歳から。書道は市内の書道教室に通い、夏休みなどは朝5時から夕方5時まで書道の勉強に励んでいました。その努力もあり、小学3年生のときには、太宰府天満宮七夕揮毫会において最年少で文部科学大臣賞を受賞。中学生のときは、日中友好

書道大会の日本代表にも選ばれます。ピアノもコンクールで九州大会に出場するほどの腕前。大学に進学すると、高校の国語と書道の教員免許を取得。卒業後は地元銀行に就職します。

「事務的な仕事を中心に何か違和感を感じていました。そんな中、お客さんから『あなたの笑顔を見ると元気になる』と言われ、書道を生かしたタレントを目指したいと、1年半で会社を辞めました」と苦笑いする原さん。退職後は、タレント事務所に所属。マルチな才能を生かし、書道家タレントとしてテレビやラジオに多数出演。一昨年

からは「大川市さわやかぐや姫」を務め、イベント出演や司会などを行ってきました。「地元柳川が大好きなので、もっと地元イベントに協力していきたい。そして全国、海外へと羽ばたいていけたら」と天真らんまんな笑顔で話してくれました。



約30時間かけて一気に制作した書の大作。原さん自身が創作した物語が書かれている

### 川柳

今月の入選作品・課題  
「石」雑詠

胸当てのいつもきれいな石地藏 佐田輝喜(明野)

道の辻にっこりとほほ笑みかける石地藏。人は生まれながらにして生病死から逃れることはできぬ。その折々に地藏菩薩は心の重荷を一緒に担いでくれた。地藏のきれいな胸当てをこしらえたのは感謝を忘れぬ名もなき人々のこれもまたきれいな心

投げ返す石の硬さは知っている 古賀幸子 (横山町)

石地藏雨にも負けず過疎の村 坂井幸利 (中島)

小石にもやつぱり理屈言う権利 吉開綾子 (筑紫町)

石段を見上げて深く息をする 小杉達雄 (中島)

石ころに身体能力試された 荒巻千恵子 (吉原)

石段を上げれば着ける極楽寺 大橋弘茂 (百町)

石けりの遠きまぼろしわらべ歌 荒巻ミネノ (南浜武)

これしきの小石に負ける老いの足 佐藤良子 (蒲生)

石ころで戻った父の終戦忌 横山保 (徳益)

投石の水輪鎮まる時を待つ 古賀麗子 (吉原)

白黒の二色で芸を織る碁石 津留和巳 (六合)

産土へ情け覚える詩碑の石 宮崎武 (弥四郎町)

庭のすみ漬物石にありがとう 大橋ミヨ子 (六合)

石段を上って見えてくる未来 阿津坂典代 (矢留本町)

川に向け投げたい石が見当たらず 船瀬憲二 (南長柄町)

意思どおり動けぬ石に月明かり 山口房子 (白鳥)

さかみちで小石ころころどこ行くの 太田胡桃 (柳河小3年)

たいように石はかがやきもらつて 吉田桃子 (柳河小3年)

いしころがじつとまっつてうごかない 末松心羽 (柳河小3年)

川柳を募集しています。選句者は梅崎流青さん。11月の課題は「旅」雑詠。入選作品は12月1日号に掲載します。

●応募方法 川柳と明記し、自作、未発表の作品(※1人3句以内)に、住所、氏名、電話番号を書いて、ハガキかファクスまたは直接、柳川庁舎企画課広報広聴係 ☎77・8425、FAX 74・5520へ、11月15日(必着)までにお送りください。

新刊の匂いが旅を唆す 流青